
BLUE i n b l u e 【番外】

ゆほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLUE in blue 【番外】

【Nコード】

N5347T

【作者名】

ゆほ

【あらすじ】

現在投稿中の「BLUE in blue」の番外編です。

以前投稿しました「年始挨拶」もこちらに移動しました。

年始挨拶

喪中だから当たり前なのだが恭輔が訪れた三浦家には正月飾りの一切がなかった。

白い息を吐きながら、門扉を開け中に入った。

戸口の横にある少し古めかしい呼びだしボタンを押すと「ブーッ」と音が鳴った。

しばらくそのまま立っていると人の扉の向こうに人の気配がして、カラカラと引き戸が開かれ、中から恭輔曰く「意志の強過ぎる女」、幼なじみで元同級生の三浦藍が現れた。

「よお」

「うん・・・暮れは、ありがとうね。」

「ああ、千晴は？どうしてる？」

「うーん、さすがに泣くのは止めたけどほとんど部屋に籠ってる。たまに下に降りて来てもあんまり食べないし・・・呼んでこようか？」

「いや、先におじさんと話しがしたいんだけど。」

「・・・分かった。呼んでくるから上がって待ってて」

そういうと藍は先に奥へと行った。

恭輔は一人で勝手知ったる三浦家のリビングに入った。

和室にラグを敷きその上にソファーとローテーブルが置かれている。ソファーには座らず壁際の飾られている女性の写真——暮れに亡くなった千晴と藍の母、美里の写真の前で手を合わせた。その手を自由にすると同時に藍と千晴の父誠治が現れた。

「お邪魔してます。」

「話があるって聞いたけど。」

「ええ」

「まあとりあえず座って。」

誠治に席を勧められ恭輔はソファに座った。

続いて誠治が恭輔の向かいに座った。

凜とした冬空が縁側から見えた。

暖房のほどよく効いている部屋には感じられない寒さが恭輔に落ち着きを与えた。

しばしの沈黙の後、恭輔は誠治の方に向きを正した。そして簡潔に告げた。

「千晴さんと結婚させて下さい。」

誠治は驚いたらしく目を見開いた。

「・・・千晴が君を慕っているのは分かる。でも、恭輔くんが千晴のことを女性として見ているとは到底思えないのだが・・・」

これまでの千晴と恭輔の姿を見ていれば至極当然の見解であって、恭輔もそれを否定しなかった。

「・・・千晴のことは可愛いと思っています。確かにおじさんが言う様な気持ちを持っているとは言いませんが、大事にしたいとは思っています。それに、今の千晴の心の傷を癒す役を他の誰かに譲る気には全くなれないんです。」

誠治に対して隠すことなく恭輔は今の本音を吐いた。

「美里のことで千晴は確かに傷ついてる。でもそれは私と藍で家族で充分に対処できるはずだ。恭輔くんに限らず誰の出番もないよ。」
誠治はきっぱりと言いつつ切った。

「でも千晴が望んでいるよ。」

お茶を運んできた藍が誠治に向かって言った。

「千晴は恭輔に恭輔のお嫁さんになりたいって言ったよ。」

「そうなのか？」

誠治は恭輔に問いかけた。恭輔は黙って頷いた。

誠治は何か思案しているようで恭輔も藍も見ることなく黙っていた。藍もその場にお盆を抱えて立ったままだった。

「少し、時間をくれないか？」

どれくらいの時間が立ったのだろうか、恭輔には長く待たされたようにも思えたし、そうではないようにも感じた。

「千晴との結婚を許可するとも許可できないとも今は答えられない。ただ一つ言いたいことは恭輔くんとの結婚を今の千晴の逃げ道にさせたくないのだよ。」

恭輔は真っ直ぐな瞳を誠治に向けて誠治の言葉を聞いていた。

「というより、恭輔くんはそのつもりで今日話をしに来たんじゃないかと思ったんだが。」

恭輔は黙ったままで否定も肯定もしなかった。

誠治は納得いった表情をしていた。

大切な家族を失った今、この家の者は誰一人として先に進むことが出来なくなっている。

しかし、いずれは先に進まなくてはならない。

そのことを考えさせる起爆剤のようなものとして恭輔が『この話』を『今』しに来たのだらうと誠治は理解している。

だからこそ、考える時間を、先に進むべきその日まで、そして何よりも幸せであって欲しいその存在のために。

「あれ？恭ちゃん？」

千晴がリビングを覗き込んできたのは話しが一区切りついたところだった。

藍があまり食べていないと話していたとおり千晴が少しやつれて見えた。

「どうしたの？」

「年始の挨拶ってとこかな。」

「ふうん」

自分に会えたことをいくらか喜ばしく思っている千晴の態度に恭輔は安心した。

「初詣でも行くか？」

「えっ？私行ったらマズいんじゃないの？」

喪中であることを言っているのであらう。

それでも恭輔は千晴に前を向けさせたかった。

「来月は入試だろ？後は神頼みしかないんじゃないのか。」

からかっているのであらうが、素っ気なく言われて千晴は肝を冷やした。

「あゝうっ」

返事に窮していたら、藍に「行って来たら？」と提案された。誠治を見るとニツコリほほ笑んでもらえた。

「じ、じゃあ。ちよつと出掛けて来ようかな？あつ支度してくるねっ。」

恭輔と出掛けられると思って少しだけ顔を赤らめて千晴は2階へと行った。

「効果抜群ねえ。やんなっちゃう。」

首だけで千晴を見送りながら藍が呟いた。

「……恭輔くん、一つだけ訂正しておくよ。」

悟りを開いたような表情で誠治が言い出した。

「誰の出番もないと言ったがあれは取り消すよ。千晴には君が必要だ。15年前に藍に千晴が必要だったように。」

「おじさん。」

「だけど、結婚を許すと言うことではないよ。このことに関してはやはり考える時間が欲しい。まずは千晴には高校入試も控えているし。いいかなそれで。」

「もちろんです。」

「千晴の気が変わるかもしれないしね。」

楽しげに言う藍を恭輔は一瞥するが黙ったままだった。
藍の言うことは事実だ。

まだ15年しか生きていない千晴が新たな出会いや成長をして、自分に対する想いを違う形に変えてしまうことはあり得ないとは言えないのだから。

恭輔はそれで構わなかった。

ただ千晴を大切に思っている。

今の恭輔はそれしか言えないのだから。

身動きの取れなくなつて座り込んでしまった千晴の手を取つて立ち上がりたい。

それだけのために今ここにいるのだから。

「恭ちゃん。お待たせっ。」

支度を急いだらしく軽く息を切らせて千晴が再び現れた。

一昨年のクリスマスにプレゼントした赤いダッフルコートを着ている。

首元に見える白のタートルネックのセーターは藍とお揃いのものだ。

「ああそうだ。これ耕一郎こういちろうと俺れいと玲れいから」

そういつてお年玉が入っていると思われるポチ袋を渡された。

「わぁ！ありがとう。耕ちゃんも玲くんも元気かな？」

「耕一郎は今日こっちに帰っているから帰りに寄るか？ 玲も休みでいるはずだし。」

「うん。」

久々に千晴の屈託のない笑みを見てホッとしている自分に恭輔は気づいた。

「じゃあ少し出掛けてきます。」

「ああ恭輔くん、宜しく頼むよ。」

恭輔は誠治の言葉を聞いて会釈で返した。

「お父さん、藍ちゃんちよっと行ってくるね。」

「いつてらっしゃい。」

恭輔の後を追う様に千晴がリビングを出て行く姿を藍と誠治は見送った――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5347t/>

BLUE in blue 【番外】

2011年5月28日11時50分発行